

令和 6 年度自己評価報告
(改善の結果および次年度に向けた改善方策について)

ようがの学び舎
世田谷区立用賀中学校
校長 毛利 慎治

はじめに

本校では、学校評価委員会の皆さまからいただいた貴重な意見をもとに、本年度の教育活動を振り返り、来年度に向けた改善策を検討した。アンケート結果の分析を通じて、学校運営の現状を把握し、特に重点的に取り組むべき課題を明確にした。今年度の取組については、成果が見られた点と、引き続き改善が必要な点があることが判明した。そこで、より効果的な学校運営を目指し、具体的な改善策を検討した。本報告では、その分析結果とともに、来年度に向けた改善の方向性を示した。

特筆すべき点として、本年度のアンケート回収率が非常に高く、多くの地域の方々が本校に強い関心を寄せていることが明らかとなった。これは、学校と地域との結びつきが強まっていることの表れであり、大変心強いことである。また、アンケートの分析を通じて、貴重な示唆を得ることができた。特に、学校関係者評価委員長 貫井 洋様をはじめとする学校関係者評価委員会の皆さまには、多大なる尽力をいただいたことに深く感謝する。

今後も、より良い教育環境の実現を目指し、地域や保護者の皆さまと協力しながら、学校運営の充実に努めていく所存である。引き続き、理解と協力を賜りたい

I 学習、キャリア教育、主体的な学びに関する内容について

質 問 項 目	肯定率 (A+Bの割合) (保護者の割合)	
	R 5 年度	R 6 年度
先生は、課題について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている。	92% (65%)	93% (65%)
私は、キャリア・パスポートに書いた目標について、考えて行動している。	55% (56%)	61% (55%)
自分の進路や将来の仕事について考える時間がある	67% (64%)	73% (65%)
私は、自己を適切に理解し、責任をもって役割を果たしている。	R 6 新設	82%
私は家庭学習 (学習塾を含まない) を毎日30分以上行っている	R 6 新設	62% (53%)

1. 授業における主体的学びの強化

アンケート結果より、「先生は、課題について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている」という項目の肯定率は 93% (保護者 65%) と、非常に高い水準を維持している。この成果をさらに向上させるため、「せたがや探究的な学び」の協働学習を意図的に組み込み、生徒が主体的に考え、議論する機会を確保する。特に、自分で問いを考え、問題解決に結び付けていく導入方法の展開や、グループディスカッション等の協働的な学びを実践し、思考の深まりを促す。

また、学校公開期間や授業参観を活用し、学校だよりやホームページ、連絡メール「すぐる」を通じて授業の工夫や成果を積極的に発信することで、生徒が自身の学習を振り返る機会を増やす。さらに、振り返りの機能を強化し、振り返りの機能を活用して学びの蓄積を可視化することで、成長を実感できる環境を整える。

2. キャリア教育の推進

「キャリア・パスポートに書いた目標について考えて行動している」という項目の肯定率は61%（保護者55%）と、昨年度より6ポイント上昇したものの、依然として課題が残る水準である。このため、月に一度「マンスリー・キャリア」を実施し、「キャリア・パスポート」と「今未来手帳」を活用することで、生徒が目標を見直し、具体的な行動へと結びつける機会を設ける。特に、教員が生徒の記録を基に、個別面談を通じたフィードバックを行い、目標達成へのサポートを強化する。

さらに、地域の専門家や卒業生を招いた講話、職業講話、職場体験をより充実させることで、実社会とのつながりを実感しながらキャリア意識を高める取り組みを推進する。なお、来年度は用賀中学校として非認知能力の向上に関する研究を進め、キャリア教育の充実を通じて生徒一人ひとりの可能性を広げる取り組みを強化する。

3. 進路指導と情報提供の充実

「自分の進路や将来の仕事について考える時間がある」という項目の肯定率は73%（保護者65%）と6ポイント上昇している。進路について考える機会をさらに増やすため、職場体験、卒業生による講話、防災講話、校外学習、上級学校の訪問授業などを継続し、最新のキャリア情報を提供する。さらに、キャリア学習を通じて課題解決力や協働性を高める活動を実施し、非認知能力の向上を目指す。特に、キャリアパスポートの記録を活用し、自己理解を深める機会を設け、進路の選択肢を具体的に考えられるよう支援する。また、上級学校の説明会への参加を促し、学習意欲の向上にもつなげる。

4. 自己決定力を高める支援策

「私は、自己を適切に理解し、責任をもって役割を果たしている。」という項目は、学年が上がるにつれて肯定率が高まる傾向にあるが、満足できる水準には至っていない。このため、生徒が教育活動の中で意思決定を行う機会を増やし、選択の場面を意図的に設ける。また、保護者会などで自己決定の重要性について説明し、学校と家庭が一体となった支援体制を整える。例えば、生徒会活動や委員会活動において、生徒自身が計画を立て、役割を分担しながら活動を進める場を意識的に設けることで、主体的な取り組みを促進する。また、学校行事の運営にも生徒の関与を深めることで、自ら考え行動する力を養う。

5. 家庭学習習慣の定着

「家庭学習（学習塾を含まない）を毎日30分以上行っている」という項目の肯定率は62%（保護者53%）であった。この習慣を定着させるため、「今未来手帳」を活用して学習時間の可視化を進めるとともに、To Do List やループブックを活用し、評価基準の明確化と提出状況の可視化を促進する。さらに、朝学習の時間や学習系アプリ「キュービナ」の活用を通じて、家庭学習の習慣化を促す取り組みを進める。加えて、家庭学習の重要性を生徒・保護者向けに継続的に伝え、習慣の定着を図る。特に、学習記録の振り返りを行うことで、学習の定着度や理解度を確認しながら、適切な学習方法を身につける支援を強化する。

II 学校生活などに関する内容について

質 問 項 目	肯定率（A+Bの割合）（保護者の割合）	
	R 5 年度	R 6 年度
学校生活は楽しい	88%（84%）	88%（83%）
先生たちは、生徒にいていねいに指導している	90%（75%）	88%（77%）
本校は、子どもや保護者が相談しやすい	71%（66%）	75%（69%）
部活動は楽しい	78%（81%）	76%（81%）

1. 個別指導の充実と教育相談機能の強化

「学校生活は楽しい」という項目の肯定率は88%（保護者83%）と高水準であるが、一部の生徒が十分に満足していない現状を考慮し、「生徒が主人公である学校」を目指し、生徒一人ひとりを大切にする個別指導の充実と強化を図る。特別支援教育の枠組みを活用し、放課後支援学習や個別授業（ステップアップ授業）をさらに充実させ、生徒の学習状況に応じたきめ細やかなサポートを実施する。

また、WebQ-Uや本校で実施している毎月の学校生活アンケートの結果を分析し、生徒の悩みや課題を早期に把握する体制を強化する。学年ごとのチームによる対応策の検討を行い、家庭と連携した支援体制の強化にも努める。特に、個別支援対象生徒に対するステップアップ授業の実施、個別支援計画の作成、不登校生徒への支援として別室登校の活用を推進する。

2. 働き方改革を通じた生徒対応の質向上

「先生たちは、生徒にいていねいに指導している」の肯定率は88%と高いが、教員の業務負担を軽減し、生徒と向き合う時間をより確保することが求められている。令和6年度はTeams等のICTツールを活用し、業務の効率化を図ることで、個に応じた指導を充実させる取り組みを進めている。

また、「せたホット」と連携した教育相談研修で得た知見を活かし、生徒との対話力向上を目的とした教員研修を継続的に実施する。個別の声掛けや指導の質をさらに向上させることを目指し、全職員が生徒と向き合う時間を確保できるよう、教員の働き方改革を加速させる。これにより、生徒一人ひとりの状況をより深く把握し、適切な指導を行う体制を整備する。

3. 生徒と教員の関係性の向上

「子どもや保護者が相談しやすい」の肯定率は75%と、一定の水準にあるものの、思春期の生徒が大人に相談しにくい傾向が見られることを踏まえ、より相談しやすい環境の整備が求められる。生徒と教員の関係性は概ね良好であり、教育環境として安定しているが、「相談のしやすさ」をさらに向上させるための具体的な取り組みを進める。具体的には、三者面談や生活アンケートを活用した二者面談を強化し、「教師と生徒の関係づくり」「生徒同士の関係づくり」「教師と保護者の関係づくり」に焦点を当てたガイダンス機能を充実させる。これにより、生徒が安心して相談できる環境を整え、他者への共感力を育む「心の教育」の充実を図る。

4. 部活動の充実と運営改善

「部活動は楽しい」の肯定率は76%と概ね高く、多くの生徒が達成感を得られる活動として認識している。部活動は、協働の精神を育み、人間形成において重要な役割を果たすため、教職員一丸となって継続的に取り組んでいく。一方で、現在、部活動の地域移行を推進しており、教員の負担軽減の観点から、部活動指導員の積極的な活用を進めている。世田谷区の部活動トライアルでは、女子テニス部が先行的に運用を開始し、教員の負担軽減だけでなく、生徒の技能向上にもつながっている。今後も外部指導員の導入を推進し、教員の負担を軽減しながら、生徒がより充実した部活動を行える環境整備に努める。

III 学校運営に関する内容について

質 問 項 目	肯定率（A+Bの割合）（保護者の割合）	
	R 5 年度	R 6 年度
私は、先生が指導した学校での過ごし方やルールについて理解できる。	83%（71%）	84%（73%）
学校行事は達成感がある。	91%（92%）	92%（94%）

1. 生徒主体で生活の決まりの意義を考えさせる機会の提供

生徒自身が学校生活の決まりの意義を考える機会を増やすため、生徒指導提要にのっとり、学校の決まりの制定について生徒自らが話し合う場面を増やす。生徒会とも連携しながら、ルールを心から守る意識を醸成していくため、生徒主体の決まり作成を推進する。来年度は土曜授業を実施しないことにより、生徒が自主的に服装を考える「カジュアルデー」を生徒会の発案から検討を進めている。また、タブレット端末の適切な利用に関する教育を引き続き実施する。以前実施した情報リテラシー教育では、SNSの法規制事例を紹介しながら、学年を通じて情報リテラシーの向上を図った。ICT技能の向上と並行して「ネットリテラシー養成講座」、「セーフティー教室」等の外部人材を活用した指導を一小时確保して推進する。

2. 学校行事の生徒主体運営

「学校行事は達成感がある」の項目では、生徒、保護者ともに含めて、運動会や合唱コンクールの満足度が非常に高い。生徒が行事を通じて、自ら考えて行動し、参加の不動の中で同僚と半後による相互作用が高まった。今後も「生徒が主人公である学校」として、生徒が行事運営に参加できる構造を強化する。行事の計画段階から生徒の意見を反映させ、実際の運営に関与する機会を増やす。

IV 用賀中学校の全体の教育活動について

今年度は学校だより、学年だより、「すぐる」、およびホームページの活用を通して、十分に情報提供ができていたというデータが示されている。今後も、重要なお知らせは生徒を通じて配布するとともに、学校連絡ツール「すぐる」を活用して保護者に周知し、家庭での確認を促す。また、親子の会話を生み出す工夫として、「お子さんが何も言わなかったら、ぜひ聞いてみてほしい」と保護者会などで説明し、家庭と学校がより密接に連携できる環境を整える。生徒が主体的に学校生活を送りながら、保護者とともに学びを深めることで、「生徒が主人公である学校づくり」をさらに推進する。

さらに、「地域と共に歩む学校づくり」を一層強化する。本校の生徒は、学校外でも落ち着いた行動をとり、地域の方々からの評価も高い。これは、教員の指導に加え、保護者や地域の理解と見守り、さらには「学び舎」としての学校間の連携が機能していることの証である。この良好な関係をさらに発展させるため、地域の方々との意見交換の場を設け、生徒が地域の一員であるという意識を高める。また、用賀コミュニティクラブや用賀中学校おやじの会が実施しているボランティア活動や地域行事への参加機会を増やし、実際に地域と関わる経験を積むことで、他者を思いやる心を育てる。

本校の教育活動は順調に進んでいるが、より良い学校づくりのためには、相談体制の多様化とICTの活用、家庭との連携強化、地域との協力体制の維持・発展が不可欠である。これらの取り組みを通じて、引き続き生徒の学びと生活を支え、「地域と共に歩む学校づくり」「生徒が主人公である学校づくり」「人の心の痛みがわかる人間の育成」を目指していく。来年度も、より充実した教育環境の実現に向け、教職員一丸となって取り組んでいく所存である。